

「障害者による文化芸術活動」の現在地

障害のある人自身が、ときには周囲の人々に支えられながら、幸福を追求し、その人らしい生活を送ることは、障害のある人にとっての権利でもあり、支援に携わる人々もそのことを願いながら日常を過ごしているでしょう。障害のある人は一人ひとり、異なる特性をもっています。その人に合った生き方や支援のあり方を模索するということは、人と人とが向き合うことの豊かさを教えてくれます。このような、支援の現場にある豊かさ、障害のある人の存在の豊かさに目を向けたり、広く社会にそのことを伝えていく方法のひとつが、障害者による文化芸術活動です。

ところで、「障害者による文化芸術活動」という言葉を聞いて、あなた自身が思い浮かべるのは、いったいどんな活動でしょうか? 絵を描くこと? 音楽を演奏すること? ダンス?書道?演劇? 人によって、文化芸術と言ったときにイメージするものはさまざまでしょう。今、日本全国では作品を創作することだけではなく、表現が生まれるプロセスを大切にした活動や、作品を鑑賞する場を工夫する活動、障害のある人の日常生活を豊かにする活動など、さまざまな活動が行われています。本章では、障害者による文化芸術活動として今、どんなことが起こっているのかを具体的に知りイメージを深め、取り組んでいく上での大切な視点を身につけることを目指します。

今、どんなことが起こっている?

●障害者による文化芸術活動とは

障害者による文化芸術活動とは、障害のある人が、個人、もしくは所属する団体やグループで行う文化芸術活動のことです。作品を制作する活動だけでなく、文化芸術に触れるプロセスを大切にした活動が行われています。こうした活動は、障害のある人自身の表現機会の拡大や余暇の充実につながるだけでなく、障害のある人と社会との接点として機能することが期待されています。

現在日本各地で、障害のある人が個人や団体で行う活動や、障害の有無に関係なく多様な人々が協働する文化芸術活動が行われています。①障害のある人のQOL(生活の質)向上や余暇の充実②障害のある人による優れた芸術作品の創出③文化芸術活動を通じた社会への課題提起など、活動する人たちの目的は幅広いようです。



障害のある本人だけでなく、その支援に携わる人々にとっても、これまでの価値観を変え、新たな福祉/芸術観を獲得するきっかけになります。

活動は、障害のある人が一人で取り組んだ表現を芸術や福祉の専門家が発見・発掘することにより可視化されたり、障害のある人が利用している福祉施設や、福祉の分野に関心を持つ文化施設 (美術館、博物館、劇場、コンサートホールなど)、芸術や福祉の分野で活動するNPO(非営利組織)などの民間の組織が活動の場を提供することがあります。芸術のジャンルは美術や音楽、演劇、ダンス、文学などさまざまです。創作活動や発表会・展覧会などに注目が集まりがちですが、創作や表現のプロセスに光を当てる活動や、鑑賞機会の拡大をはかる活動など、障害のある人が文化芸術とのあらゆる接点を拡大するための活動が行われています。

このような文化芸術活動が広がることにより、障害のある人が自分らしく社会の一員として生きることにつながると同時に、障害のある人のみならず、高齢者や外国人などさまざまな立場の人たちも含めた「共生社会」をさらに発展させることが期待されます。



●知っておきたい! 文化芸術活動の切り口

障害者による文化芸術活動とひとくちにいっても、活動の形態や方法はさまざま。

障害のある人の優れた美術作品の展覧会を開くことは日本全国で行われていますが、そればかりではなく、実にいろいろな活動の可能性があります。

障害のある人(身体障害/知的障害/精神障害、その他さまざまな障害のある人たち)にとって文化芸術活動は、「表現する」「伝える」だけでなく、「楽しむ」ことや「自分らしさを知る」ことにつながります。さらには作品や活動を通じて人や社会と「つながる」ことや、多様な「はたらく」機会を生み出す可能性がひらかれているものです。

活動を企画するうえでは、文化芸術活動の ①ジャンル ②方法 ③場 の3つの要素をどのよう にアレンジするかが重要です。





障害のある人が文化芸術活動に取り組むときには、いまだに多くの心理的・物理的な障壁がある ようです。実際に障害のある人やその家族、支援者とコミュニケーションを取りながら、どのよう な活動が今必要なのか、そのために現実的にできることは何か、周囲に協力してくれる人や組織 はいるか、などを総合的に考えていくことが求められます。

以下では、全国で行われている活動の例が掲載されています。障害者による文化芸術活動の幅の 広さを知り、それぞれの活動が何を目指しているのか、理解を深めましょう。

人との結びつきが「はじまる」場

はじまりの美術館 [福島県]

美術 見せる・語る 福祉施設・文化施設

運営母体:社会福祉法人安積愛育園



[活動の概要]

母体となる社会福祉法人では障害のある人の生活の充実を目 指し、20年以上前から創作活動に取り組んでいる。小さな作品 展を開いたり、作品を公募展に応募したりすることで、障害の ある人に対する親御さんや周囲の人たちの反応が変わってい くことに手応えを感じ、2014年に「はじまりの美術館」を開館。 障害のある作者の表現にとどまらず、現代アートや伝統工芸な どのさまざまな表現をひとつのテーマに合わせて紹介するな かで、作品だけでなく人を知り、人との結びつきをつくること ができる場をつくる。福島県障害者芸術文化活動支援センター としても活動し、研修会などを実施。障害のある人たちだけで なく、誰もが暮らしやすい社会の実現を目指す。



はじまりの美術館館長 岡部兼芳さんのお話

展覧会では、気になった作品にメッセージを寄せてもらったり、伝言板をつくったりするなど、鑑賞して くれる人との対話のきっかけをつくっています。そのことで、多様なまなざしや価値観が共有できる場 所を目指しています。「障害」と「アート」はどちらも似ていて、ふだんは遠ざけられているけれど、どちら もものごとを変える力があります。この二つが接することで、何かがはじまるといいなと思います。

ろう者の文化を芸術を通じて共有する

育成×手話×芸術プロジェクト [東京都]

演劇・美術・映画 作る・見る・語る 文化施設 聴覚障害

主催: 社会福祉法人トット基金



[活動の概要]

このプロジェクトは演劇・美術・映画の3つの部門からなる。ろう 者自らが主体となって進める点が特徴的で、国際芸術祭創設に ふさわしいレベルで結実するよう、2017年より複数年の実績 を重ね、ネットワークを構築している。ろう者による作品制作 だけでなく、聴者との協働制作や、ろう者と聴者が一緒に鑑賞・ 対話をする企画などを試みている。美術部門では、美術館にはろ う者の意見を言う場がなく、作家もろう者を知る機会がないと いう問題意識を持っている。活動を通じて、美術が聴者の歴史 そのものであり、ろう者の文化に翻訳するのが難しいことに気 づいた。ろう者の世界は複雑だからこそ、芸術活動を通じてそれ をひらいていき、共有する場を目指す。



プロジェクトスタッフ 牧原依里さんのお話

聴者からは手話自体が芸術だと言われることもありますが、あくまで手話は言語です。ですが、手話を含 めた「ろう文化」に出会うことで、別の世界の見方があることを感じてほしいと思います。聴者にとって もろう者にとっても、知識だけではなく、まずはろうの世界から生まれる芸術を体験することが重要で す。ろう芸術を醸成していくために、ろう者同士の固有感覚を共有する・創造や発表の場を拡充するとと もに、聴者とろう者がお互いの感覚や世界観を交換しながら協働していく、車の両輪のような関係を築 いていくことが、今後の芸術の発展に必要不可欠だと思います。

視覚障害のある人の声を聞き、ダンスの場をつくる

島根県民会館

インクルーシブシアター・プロジェクト [島根県]

ダンス つくる・見る・見せる 文化施設 視覚障害など



[活動の概要]

障害のある人向けにモニターツアーやバリアフリー上映に取 り組んでいたところ、あるイベントに視覚障害のある人が多く 参加したことをきっかけとして、視覚障害のある人を対象に振 付家・ダンサーである田畑真希さんのダンスワークショップを 開始。相手の動きや体温を感じながら表現が変わっていく時間 を重ねたことが、視覚障害のある人にとって「自分を表現でき る」という安心や信頼感につながったようだ。このような経験 を踏まえて2019年にプロジェクトを本格化。現在はダンス公 演や鑑賞体験プログラムを実施している。



島根県民会館文化事業課 門脇永さんのお話

劇場がこれまで対応してこなかったことはたくさんあります。機会をつくることで課題が生まれ、次に つながるので、機会を絶やさないことを意識しています。障害のある人の意見を聞くことなく支援に取 り組むということはやらないようにしており、ひとつの意見だけでなく、できるだけいろいろな意見を 集めて判断したいと思っています。障害のある人だけでなく、一緒に活動に取り組むアーティストや参 加者、支援者との関係も大切にしています。

障害のある人の行動や行為を肯定的に捉える場

なんでそんなんプロジェクト [岡山県]

美術・生活文化 見せる 福祉施設 知的障害など

実施主体:生活介護事業所 ぬか つくるとこ



[活動の概要]

岡山県早島町の生活介護事業所「ぬかつくるとこ」が始めた、日 常の福祉の現場に限らずどこでも起こり得る「よくわからない」 行為や制作物に注目し、同時に「なんでそんなん」と愛を持って ツッコミを入れる「肯定的発見者」の視点も醸成するプロジェク ト。ぬか つくるとこや中国・四国広域センターArtbrut Support Center passerelle (パスレル)、アーティストの滝沢達史さんが 協働し、全国から集まった「なんでそんなん」の事例を一挙展示 する博覧会(エキスポ)も開催。特に障害のある人の行動や行為 に悩む支援者に新たな視点をもたらすものとなっている。



パスレル 土谷享さんのお話

福祉の現場で問題行動と扱われる行いに対して、「なんでそんなんプロジェクト」の視点や考え方を取り 入れることで、問題だった行動が転じて日々に豊かさを育む「種」になると思うんです。問題行動を一方的 に改善させようというものではなく、ちがいを認め合うことで、想像力を駆使し、ユーモアや、笑顔につな がると思います。このように生きやすさをもたらすこと自体が、文化芸術活動の役割なのかもしれません。

大事にしたい



障害者による文化芸術活動を支えるときに大事にしたい視点は さまざまですが、ここではポイントを3つに絞って解説します。

障害のある人のことを知ること

取組を進めるときに、障害のない人たちが思いつくことだけで物事を進めるのではなく、障害のある人自身やその周囲の人たちと相談しながら活動を始めることが重要です。また、障害の種類や特徴について理解を深めるのも大切でしょう。福祉の現場で働く人にとっては、活動を続けていくことによって、目の前で支援している障害のある人以外とのつながりをつくることにもつながり、福祉の現場に対する視野を広げることにもつながります。そのことが、日々の支援を豊かにするきっかけになることも期待できるでしょう。

2 文化芸術活動の機会をつくり続けること

創造・鑑賞・発表など活動の方法はさまざまですが、いずれにしても障害のある人が活動の機会を持ち続けられるような工夫が必要です。またそのときに、障害のある人自身が主体的に活動を選ぶことができるように、できるだけ多様な選択肢を準備するということも工夫のポイントです。障害のある人自身が文化芸術活動に接することで、その人の生きがいにつながったり、自分らしさを発揮できるきっかけになるための工夫を、一人ひとりに合わせてコーディネートしていくような視点が求められるでしょう。

③ 文化芸術活動のプロセスを大切にすること

障害のある人が文化芸術活動に取り組んだ結果、質の高い作品や、グッズ展開につながる可能性がありそうなデザインが生まれることも大切な成果です。ですが、文化芸術活動を体験することで障害のある人やその周囲の人々にどのような「変化」が生まれるのか、という視点こそが重要です。障害者による文化芸術活動の多くは、障害のある人が一人で完結させるものではなく、多くの人たちの関わりによって成り立っています。その関係性が活動を通じて変化することで、日々の支援におけるコミュニケーションの質が変わったり、障害のある人に対するこれまでの見方が変わる可能性があります。

- ●障害者による文化芸術活動と言えば、創作活動や発表会・展覧会などに注目が集まる
 - → 創作や表現のプロセスに光を当てる活動
 - → 鑑賞機会の拡大をはかる活動 など

障害のある人が文化芸術とのあらゆる接点を拡大するための活動が行われている。

- ●障害のある人による文化芸術活動が目指すものは、
 - ① 障害のある人のQOL(生活の質)向上や余暇支援
 - 2 障害のある人の視点からものごとを捉えることによる優れた芸術作品の創出
 - 3 文化芸術活動を通じた社会への課題提起 など幅広い

障害のある本人や支援者にとって、新たな福祉/芸術観を獲得するきっかけに。

- ■活動を支援する際に大事にしたい視点は、
 - 障害のある人のことを知ること
 - 2 文化芸術活動の機会をつくり続けること
 - 3 文化芸術活動のプロセスを大切にすること





- ●あなたの身近には、どのような障害者による文化芸術活動が行われていますか?見聞きしたことがあるものをできるだけ多く挙げてみましょう。
- ●6~7ページの全国で行われている活動の例を見て、 どんなことを感じたか、話し合ってみましょう。

